

ECLAC50周年セミナーによせて

北野浩一

ECLAC は、1949年に設立されましたが、今年ちょうど設立50周年にあたります。これを記念して、その活動を振り返るいくつかの試みがなされています。まず、「50年間のECLACの思想(Cinuenta años de pensamiento en la CEPAL)」と題する、ECLAC から出された歴史的文献を収録した本が出版され、また、ECLAC の代表的な雑誌である *Revista de CEPAL* が50周年記念特集号を出して、ECLACの開発思想を歴史的に検証しています。

この50周年記念行事の一環として、10月26日に「ECLACの50年間——そのラテンアメリカの開発思想と発展への貢献」と題するセミナーが開かれました。今年は、チリ外務省との共催で行なわれ、内外の学者だけではなく、多数のチリ政府関係者の参加も得て行なわれたのですが、たまたまイギリスでの元ピノチェト将軍の逮捕事件の最中ということもあって、多くの報道関係者が詰めかけました。

セミナーは年代ごとにパネル1「50、60年代」、パネル2「70、80年代」、パネル3「70、80年代」、パネル4「今後の挑戦」の、四つにわかれて行なわれました。パネリストが12人の大会議を1日で実施したため、発表者1人あたり15分の持ち時間しかなく発表は概説的なものとならざるを得ませんでした。新構造主義を代表する学者が一同に会しECLACの貢献を評価する、というまたとない機会となりました。

ECLACの50年を振り返って

最初のパネルは、エイルウィン前大統領が議長となり、ECLAC 設立時の1950年代からECLACで活躍してきたオスワルド・スネル、そしてローズマリー・ソープ、アルベルト・フィッシュローによる発表がありました。設立年に出版された、有名な「ラテンアメリカ経済研究(Estudio económico de América Latina)」、およびその前文として書かれたプレビッシュの「ラテンアメリカの経済開発とその主要問題」は、初めてラテンアメリカ全体を一つの経済単位として分析し、また構造的側面を重視した学際的研究の先駆けとなったとして、高く評価されました。しかし、その当時ECLACが提唱した輸入代替による工業政策は、国内権益を重視する政府に誤用されたり、あるいは増大する貿易の利益を過小評価するために、支持されなくなってきた、としています。

次の1970、80年代のパネルでは、元事務局長のロベルト・ゴンザレスをはじめアンドレス・ビアンキ、エドマール・バシャによる発表がありました。70年代は主にインフレーションと、経済開発における外資依存が高まる中でオイル・ショック、そして80年代は対外債務問題処理がECLACでも大きな課題となりました。その中でECLACはインフレーションにおけるイナーシャなど構造的要因を強調してきました。また、80年代にはECLACが

ECLAC の思想とその背景——歴史・構造主義的分析

年代とテーマ	国際的連関	経済・技術進歩と雇用・所得分配に関する国内の構造的条件	国家の役割
1948～60 (工業化)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 交易条件の悪化 ・ 国際収支の構造的不均衡 ・ 地域統合 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 輸入代替の進展 ・ 特化と異質性による反目 ・ 構造的インフレと失業 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 慎重な工業化の推進
1960 (改革)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対外依存 ・ 周辺国の不安定性を軽減する国際的な政策 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経済再生のための農業改革と所得分配政策 ・ 構造的異質性 ・ 従属性 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 開発のための改革
1970 (発展様式)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対外依存と対外債務の増加 ・ 輸出の低迷 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発展様式、生産構造所得分配、および権力構造 ・ 国内市場と輸出の組合せによる工業化 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同質的社会構築 ・ 工業輸出促進
1980 (累積債務)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 金融支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 成長を伴うマクロ調整 ・ ショック療法への批判と、所得政策 ・ ショック療法修正の必要性 ・ 調整の社会的コスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 成長を伴う調整を可能にするための債務再編
1990～98 (生産様式の転換と社会的公正)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 輸出特化の失敗と国際資本移動の不安定 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生産様式の転換、社会公正の実現の困難性 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 公正を伴う生産様式の転換を実現するための政策の実施

(出所) Bielschowsky, Ricardo, "Evolución de las ideas de la CEPAL," *Revista de la CEPAL*, número extraordinario.

ら、経済成長を伴う調整(Ajuste con crecimiento)、構造調整の社会的コスト軽減が提唱されています。

次のパネルでは、昨年まで事務局長を務めたゲート・ローゼンタールが回想を交えながら1990年代のECLACの活動を語りました。その中でこの時期、最も重要であったとしているのは、90年の「生産様式の転換と社会的公正」の発表です。これによって、それまでの開発における構造的側面や、政府の役割を重視するECLACの立場に、自由貿易・マクロ経済の安定といったネオリベラルの主張を取り入れた統合された枠組みが整った、としています。続いて発表したノラ・ルスティグは、市場メカニズムのみの資源配分の問題点を指摘し、特に所得格差に対するECLACの対応を評価しました。

ECLACの将来像

セミナーの最後は、ECLACの活動に対する要望がアニナット蔵相より述べられました。今後は、(1)経済だけでなく、文化や統治も含めた経済統合の効果、(2)国際化と規制、そして(3)教育・医療・年金など、「第二世代の改革」と言われる社会改革に関する研究が必要である、としています。

大学でもなく、また研究機関とも異なるECLACがラテンアメリカの「思想の中心(Centro de pensamiento)」として存続していくためには、今後も各国政府との協力関係を維持しつつ、地域の構造を重視した独自の政策立案が必要であると思われます。(きたの・こういち/在サンチャゴ海外派遣員)